

山梨県総合計画審議会第5回基幹産業発展部会 会議録

1 日 時 平成29年11月21日(火) 午後2時～午後3時

2 場 所 ホテル談露館「アンバー」

3 出席者

・ 委 員 (50音順、敬称略)

飯山 明裕 石川 百合子 木下 眞邦 清水 一彦 進藤 中
立石 貴子 中込 裕 萩原 雄二 孕石 泰丈 樋口 雄一

・ 県 側

総合政策部長 エネルギー局長 産業労働部長 企業局技監
(事務局：政策企画課) 政策企画課長 政策主幹

4 傍聴者等の数 1人

5 会議次第

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) 総合政策部長あいさつ
- (4) 議事
- (5) 閉会

6 会議に付した議題 (すべて公開)

- (1) 答申案について
- (2) その他

7 議事の概要

- (1) 議題1について、資料により事務局及び部局長から説明し、次のとおり意見交換を行った。

(委員)

皆さんに意見をお聞きする前に気付いた点として、2ページの丸の4つ目については、「推進すべき」とあるが、他の表現と合わせるとしたら「すべきである」に統一したほうが良い。もう1点は、その2ページの一番下から2行目に「受け皿をつくって」とあるが、3ページの起業・創業関係のところでは、「経営コンサルでチームを作って対応して欲しい」とあるので、この「つくって」はどちらかに統一されたほうが良いと思う。

(委員)

この「おわりに」を読んで少しほっとしている。多分、前回、委員がおっしゃったと思

うが、激変している、そのスピードに追い付いていけるかどうかというのも非常に不安な部分だった。委員もおっしゃっていたが、自動車が家電になるような時代。他のことでも、金融でもいろいろなことが起きてくるかもしれない。その時の激変に備えて対応する能力というのを常に持とうという意味を持っていただけているということは、この「おわりに」を読んだ時にちょっとほっとした。

(委員)

何か漠然としているという感じがするが、これで動けるのか。

(総合政策部長)

各委員からご意見をいただく中で、具体的なご提言もいただいております、私どもの方でも内容は承知をしている。これは、そのエッセンスをとりまとめているということであり、委員からいただいた意見の趣旨とか意図は、私どもとして理解をしているつもりである。もし委員から、もしこれについてはこういった表現に、より具体的にこういった形に変えるべきであるということがあれば、本日またご意見を賜ればと思っている。

(委員)

文章の語尾を見ると分かると思うが、「すべきである」という、非常に強い優先順位の高いようなものから、何とか「して欲しい」とか、「必要である」とか、微妙にニュアンスが違っているというのは、その辺の濃淡が含まれていると理解している。「すべきである」というのは、かなり優先順位が高いというふうに捉えてよろしいか。

(総合政策部長)

先ほど申したとおり委員のご意見の思いもあり、そういったものをできるだけ反映させていただいた。

(委員)

そもそもの論議の段階で参加をしていないので、なかなか意見が言いにくいところがあるが、今言われたところの個別具体的な取り組みの中身、それについては、恐らくこれから、さらに具体化して進めていくのだらうと思う。重要なのは、その個別具体的な取り組みは、恐らく成功する事例もあれば、失敗する事例もあるだらう。それはもう物事を進める段階では、当たり前と言ったら言い過ぎかもしれないが、全てが成功するということはありえないし、全てが失敗すると言ったら、これはもう完全に計画倒れということになる。

そこのところを、今回のこの答申ではなくて、中間なのか、何なのか、ちょっと言い方は分からないが、何が良くて、何が悪かったのか。そして悪かったところについては、止めるという勇気も必要だと思うし、もっと他の考え方も必要になるかもしれない。いずれにしてもそういった総括というか、中間総括も含めて、きちっとチェックをしていくというところがこれから重要になってくるのではないか。

(総合政策部長)

今回いろいろな形でご意見をいただき、PDCAで回していくというのが、行政の風土文化として定着しつつある。いただいた答申は、大変重たいものだと思っておりますので、

ご意見はどういった形にせよ尊重して、できるかぎり反映していく。それを実施して、どういった成果が上がってきたのかということで、また見直しをし、不断に回していく形で、できるかぎり効率的に回していくという心づもりで進めて参りたいと思っている。

(委員)

個別の点でご意見を述べさせていただきたい。

3ページの上から4つ目に「山梨の良さや県内の優良企業を県外の学生にアピールできるスマホサイト」とあり、確か前回か前々回ぐらいの時に話が出て、「COC+事業と連携して」という形で書かれているが、COC+事業は基本的に県内の大学の学生が県内に就職するところを目指しているところがあるので、この県外の学生だけでなく、「県内外の学生にアピールできるスマホサイトを作っていたらいい」というふうに変えていただけたらいいかなと思う。

その上に、「県と県内企業が連携した実践・企画型インターンシップ」とか、その更の上に「長期の若者向けインターンシップ制度」と書いてあるが、この辺りもCOC+事業でやっている内容で、実践型・企画型のインターンシップは甲府市とCOC+と県内の企業で連携してすでにやられているので、この辺りのインターンシップと就職関係のことは「COC+の事業と連携して進めていって欲しい」という形に変えていただけたらと思った。

(委員)

4つ目の丸で、「県内外」のほうが良いのではないかということだが、確かCOC+事業でも横浜市立大学とも連携しており、初年度の数字を見たら、横浜市立大学の学生一人が県内に就職している。数字の上では非常にまだ少ないが、県外にアピールするというのは非常に重要なことで、合わせて県内の学生というのも、ここは問題ないかと思う。もう一つ、インターンシップとCOC+事業については、また検討していただきたいと思う。

(委員)

「おわりに」について、非常にいい取りまとめかたをされているが、その前のページの県民意識調査結果との整合性について、改めて突き合わせをしていただきたいと思う。そこをやはり県民が一番見ると思うので、県民じゃないところで作ったような見方を取られないように、連動性というか、行政として自分たちの思いの部分がどこどこに散りばめられているなという、もちろん個別にはいろいろとあるが、そういった整合性を答申を作る時には再確認をしていただければありがたいと思っている。

極めて個人的な、一意見として申し上げると、やはりリニアの走る時代に向けて、かなり各部会からの意見が入っている。そうするとやはりリニアのスピード感というものを、公共交通とか企業誘致とか、そういったところでどういうふうに共有できるかが非常に大事だと私自身は思っており、意見としてそれは申し述べさせていただきたいと思う。

(委員)

最初のほうの県民意識の調査を、もう少し終わりのほうでも更に強調する方がよいと思う。

(委員)

せっかく直近のものがあるので、「おわりに」ではかなり多くの施策事業に成果が流れているという取りまとめの仕方をしており、さらにそれを進めようと。あるいはこの答申を参考にせよということであるので、今年8月に実施した県民意識調査との突き合わせをいま一度していただいて、広く県民がこの審議会の議論を見た中で、こういう県民は意識を持っている、審議会はそういったものとどのように進んでいったんだな、かけ離れてないなというような思いを持っていただけるような取りまとめをしていただければありがたい。

(委員)

この答申は、当然、10年後ぐらいを目指していかなければいけない部分も含めて、先ほどのリニアのことまでやっていくわけだが、本当に人口を増やすということが難しいなどいうのを感じる。この内容を読んでいて、本当に策がないというか、小手先のことをやっても、きっと他の県もみんな同じことをしているだろうから。実際に、日本の人口が増えているのかと言えばそんなことはないわけで、山梨も当然難しいということになれば、周りから人を呼んでこれるのかということになると思う。

ただ、昔の考えでいくと人が増えれば産業が発達して、ある意味景気が良くなるみたいなイメージがあるが、よく考えてみると、今後きっと10年、20年経った時に、じゃあ人がいれば本当にそうなるのかというのは、ちょっと違うんじゃないかなと近頃感じている。

ご存知のようにネット社会と言われていて、本当に今の子どもたちが実際世の中で働く時代、あと10年、20年後にはきっとものすごく高速な通信網の中で、今のスマホなんていうのはきっとおもちゃというか、本当に原始時代の道具みたいな状況になっていく。皆さんもご存知のように、20年前はこんなものはなかったのだから、実際ゲームも全然違う状況だった。プレイステーションなどをやっていたと思うが、今はもうそういったものではなくて、スマホでできるわけなので、そのうちこれももう当然時代遅れになる。

今でも東京に行って仕事をしないと、やはりビジネスができないのかなということで、渋谷辺りに行って集まってビジネスしようとするが、もう実際はテレビ会議で何時からじゃあやりましょうとか、これは東京都に限らず、福岡であろうと山梨からもできるし、当然他の国ともできる。

実際、もうお金は掛からずにやれるわけで、本当に行く必要があるのかとかという状況の中で、人を増やすということが不可能であれば、そこにそんなに無理してやることはないのかなという感じがしている。

逆に言えば、ものすごく高速の回線が安く使えるような環境で、そういう企業が集まる、アイデアというか、その頭脳が集まりやすいような環境をどうやって作るかということになるのかなと思っている。AIとかロボットとかいろいろ言われているが、本当に一握りの天才が現れて、実際世の中を変えていくということはあるわけで、そういうことも含めて何か山梨を中心にとするとか、ここに生まれて地の利がないからできないというのではなくて、もうそういう通信環境みたいなものに対するもっと投資があったほうがいいのかという感じがする。どちらかと言うと、今までは箱物を造って、地元の転機に繋がるようなものがどうしても優先されてきたと思うが、やはり20年先とか30年先から今を見た時に、本当に今何が必要なのかなということをもっさらな頭で考える必要があるのかなと思う。

よく言うのだが、本当に30年先から今を見たら原始時代なんだから、もうあの頃はマウスがあったねとか、何かパソコンを一生懸命手でこうして、こんなことしていたよねみた

いな笑い話になる時が必ず来るので、そのところから見たものを考えていく必要があるかなと思う。

今の話で、具体的に何か書けという話ではないが、そういう意味ではもうちょっと先からこっちを見た感じの視点が必要かなと。激変するのは当たり前なんで、それを受け止めて何とかしようというよりは、その先へ行って、要はもがきたいというふうに思っている。

(委員)

そのとおりだと思う。グローバル化とか情報化とか、いろいろ叫ばれているが、施策とか改革の時には未来からの視点というところが非常に重要なポイントではないかということ委員がご指摘された。

(委員)

特に印象としては、これはダイナミックやまなしの総合計画の進捗状況ということであるので、例えば私の関連する、上の成長産業の二つのところ、水素燃料電池のロードマップとか、その辺については、このような観点で実際にロードマップの策定と、あと策定段階の連携というのが進んできているので、それは大変感謝申し上げます。

ここで、ダイナミックやまなし総合計画を進展させるための進捗状況については、かなりいいのかなと、評価できるのかなと思っており、じゃあその次をどうなんでしょうかと。例えば、このロードマップができる。今年度で恐らく発行されると思う。また、その時には一番目に書いてある参入しようという中小企業が、課題や阻害要因を把握できるでしょうと。そうなったらどうすればいいんでしょうかと。恐らくロードマップに書かれたようなところの実行に移るでしょうし、企業が参入するためのいろいろな支援の施策を具体化しなきゃいけない。

その次の段階のことを私も言えばよかったなと思うが、こういう進捗が良かったものについては、やはりその次の段階をどうするんですかというのがかなり大きな次の関心事になってくるので、この答申はこれはこれで進捗状況に関するものだとすると、これによろしいと思うが、その次に4年目、5年目の課題を具体的にしっかりしていった欲しいなというのが私の率直な感想。

(エネルギー局長)

委員には、検討委員会の委員長に就いていただいて、いろいろ指摘をいただいている。委員がおっしゃるように計画は作ったと。そして課題も浮き彫りにしたと。そこをどうやって施策として埋め合わせていくのかということが今から重要になってくる。そういった計画に基づいて、いろいろな個々具体的な支援策だとか、課題解決策だとか、そういうことを民間企業の方々、特に水素社会は山梨大学で研究されており、県の産業技術センターでもやっているが、地方公共団体だけではなかなかできない。民間と連携していかなければならないということで、県、市町村、それから民間の方々等をお招きしながらいろんな取り組みを実践していきたいと考えている。

(委員)

この中にエネルギー関係というのはやまなしパワーのことが書かれているだけだが、先日COP23というものが行われて、アメリカがパリ協定を脱退してしまったという流れの中

で、今度は地方自治体が大きな役割を担っていくんだということで閉幕したように、国レベルがもっと下りてきて、地方自治体独自の施策というのがもっと強く求められていくんだと思う。そこで山梨県も2050年にはCO2ゼロという目標を掲げているが、目標だけでは動いていけないので、それを実現するにあたって本当にどうしたらいいのかということ、周りを見渡してやるんだというのではなくて、実際にそこに到達するための施策をきちんと打ち出していく必要があるのかなと思う。

(委員)

今やまなしパワーという言葉聞いた時に思ったのだが、パワーじゃなくてスタイルなのかなと気がした。山梨スタイルというものを作っていないと、何かと競争する時に相手と同じ土俵に乗っちゃって、東京と同じ土俵に乗ったら勝てるはずがないし、勝とうとすると面倒臭いし。あるいは今から30年後のことを見据えてと言うんだけど、それに向かって行くんだしたら、パワーを持って進んでいくんじゃないかと、自分のスタイルをまずきっちりと作って、それから進めて行くのではないかなと。

この県民意識調査の結果の速報も、これ満足度がかなり高かったと思うが、県民の皆さんの、あれひょっとしたら比較対象がなかったから満足度が高かったのではないか。住むということに関して、東京の井の頭沿線に住んでいることを想像してみてください。それと今住んでいるあなた、どちらが幸せですかといたらぐっと低くなったのかもしれない。ですから、捉え方みたいなもの一つでどんどん現実までもが変わっていってしまうのであれば、そんなものに流される前に自分のスタイルというものを、山梨スタイルというものを明確に出していったほうが得なのかなと、今、委員の意見を聞きながら思った。

(委員)

大変貴重なご意見ですが、やまなしパワー事業というのは、これは一つの事業の名前としても命名されているので、ここをやまなしスタイル事業とするには、ちょっと無理があるかなと思う。ただし、ご指摘の点は重要だと思う。よく委員も使われているが、山梨らしさとか、スタイルとか、らしさとか。

(委員)

今回いただいた資料に、これは、まなび・子育て環境部会の担任事項で、直接基幹産業発展部会とは関係ないが、この5ページの下から3つ目の丸のところに、「小学生や中学生の頃から地域と交流して、地域の魅力を知る教育を行い、将来、山梨に残るきっかけづくりをして欲しい」という一文がある。最近私もいろいろな発言の場でこのことを強調しているが、今年2月に山梨県の教育委員会から「ふるさと山梨」小学校版、中学校版という教材が出された。これは10年前に当時の教育長の時に出版された「ふるさと山梨」の小学校版、中学校版の改訂版である。私はその10年前の版を見て、ものすごくいい本だと。やはり人の教育というのは小さい頃から何年も掛けてやっていくものなので、山梨で生まれ育った子どもたちに山梨のいいところ、山梨の歴史文化、こういうものを徹底的に教える、そういう体制が必要だろうなということも思っていた。

そのことを、この間、山梨総研20周年のシンポジウムの中で発言をしたら、現在の守屋教育長がすぐ、実は改訂版が出ていますと言って、その改訂版を持ってきていただいた。この改訂版は山梨の歴史であるとか、文化であるとか、地理であるとか、そういうものに

英語の解説も入っており、教材としてはすごく洗練された、いい教材だと思う。たまたま今ご紹介をした、この5ページのここにあるように、やはり小さいうちから山梨の魅力、歴史、文化、こういうものを教えていけば、将来山梨に戻ってくる人も間違いなく増えるだろうと思う。そういう意味で、この山梨学と言うか、ふるさと山梨をきちっと皆さんに知ってもらい、教えてあげる、そういう教育をまず持続して欲しいというのが、まず私の意見。

そういうことを踏まえる中で、様々な取り組みをこれからしていく。それは5年後、10年後、あるいはひょっとすると20年後に花が開くものかも分からないが、そういう地道な努力を重ねていく必要があるのではないかと。

そういう中では、先ほど委員がおっしゃったように、これからの世の中、劇的に変わっていく。そういうことを踏まえる中で、じゃあ山梨がどういう姿で残っていったらいいのかといった時に、山梨らしさ、山梨ならではのものをきちっと残していく必要があるだろうなと思っている。

ちょっと話が長くなって恐縮だが、これから多分、ますます東京であるとか、大都会への集中が進んでいって、今以上に大都会の利便性というものが向上していく時代が来ると思う。山梨県でも甲府市が中心になるので、甲府の駅前をきれいにしたりということが起こっているように、日本全体で見ても東京はいろんな意味で都市化が一層進んで、利便性の本当に何か塊のようなどころになっていくことは、もう必然だと思う。そうするとどこの地方もみんな段々人が少なくなっていく。その時に、それぞれの地方が残っていくためには旧来からあるその地方の特性、固有の資源というものをきちっと生かし、引き継いで育てていくと。それしかないような気がする。

したがって、部会長もおっしゃったように、私は、山梨らしさ、山梨ならではのものを残していく、そういう努力をいたしましょうということを、いろいろな場所で必ず申し上げている。そういうことを含める中で、今回まとめていただいたこの内容については、私の考えているところも随所に入れていただいております、よくまとめていただいたと思っている。

(委員)

先ほど一部の方にお配りしたが、ある若者がいる。若者といっても、もう35歳だが、この彼のグループのものすごいところが実践力。考えると、何かを行うとかという、それを行動に移すまではできるところが少ないですけど、彼は必ず形にして実績を残して、そして次のことをやっていって、次のことでも考えて形にして実践して結果を残していくという、なかなか希少な若者だと思う。

彼の成功の秘密というか、実践できる秘密を見ていると、無い物ねだりは絶対しない。そこにある物を使って、それをどうやって生かしていこうか。南アルプスの楕円山に理想的なダウンヒルのコースがある。彼は日本有数のマウンテンバイクのビルダーでもあるが、考えた時に自分一人じゃ無理だと。そしたら地域と一緒にやっていく。

まずボランティアで林道の整備。広域路、林業古道、基盤道の再生維持管理や何かを全部一人で始めた。それをやっている姿を見て、地元の人たちが協力してくれた。その次に今度は地元の南アルプス市のみどり自然課であるとか、観光商工課までが応援をしてくれるようになったところで、初めて今度は都心から人が集まってきた。

形としては、その実践力というのはマウンテンバイクだけではなくて、例えば遊休農地があったらブドウ畑をもう一度自分たちで再生して、ワインを造って、それを販売すると

ころまでをやってしまうと。あるいは地域に猟師が一人しかいないということであれば、自分たちの中から三人出して、三人に狩猟の免許を取らせて、いわゆる里山のあるべき姿というものに戻していこうということを並行してやっていっている。

自分たちだけが得をしているんじゃないで、みんなで得しましょうよというような形を実践して行って形にしていると、周りの人たちだけではなく都心の人たちまで付いてきてくれる。確かに案はたくさん出たが、それをやれたらいいなとは思うのかもしれないけれども、お手本がないとなかなか、じゃあどういうふうにやればいいんだ、あるいは本当に成功するのかみたいなことがあって、いま一步踏み出せないと思う。

このような若者がいるということ、この彼に対して二つの危惧を抱いた。二つ危ないなと思ったのは、一度も県と接していない。縁がなかったからということだけだが、使っているものは県有林であり、あるいは県の施策とすごくダブっているところもあるのに、一度も県とのコンタクトが取れていないというのが一つ目の危ないなということ。その中の、もう一つの危ないなと思ったのは、実際に彼の行動を今そのまま突っ走っていくと、何かが起こった時、事故なり何なりがあった時に全部がつぶれてしまうのではないかと。

せっかく咲いた花なのに、それを簡単に台風か何かでバサッと切ってしまうような危惧があるのではないかと思ったので、先ほど各部長にお願いしたが、一度彼と会っていただいて、そして彼の夢、その夢の実現の仕方というようなものを実際に聞いていただいて、ひよっとすると、この答申の中に生かしていけることがあるのかもしれない。その実践方法のマニュアルみたいなものが意外に簡単などころにあるのかなというような気がするの、そういった手本をまず示していくこと、それが大事ではないかなと思う。

(委員)

国立森林総合研究所が筑波にあるが、むしろそういうところのほうが注目している。そしてシンポジウムがあると参加するのではなく、行ったら登壇して、自分たちで講演をして帰ってくる。そこまでやらせなかったら行かないよと言って、行ったからには元を取って帰ってくるぞみたいな、そういう部分は非常にはっきりしている。そういう部分をもっと見習って、若い人たちが待っているのではなく、アイデアを出すだけじゃなくて、どんどん形にしていくというのをむしろ応援できるようなものがこの中にどんどん入って。

(委員)

実践的なモデルということでご紹介させていただいた。

他にご意見等がなければ、出された意見、修正意見も含めて事務局のほうで検討していただくということにして、基本的には本日のこの答申素案については了承ということでもとめたいと思う。

以上

(2) その他

総合計画審議会の今後の審議スケジュールについて、事務局から説明した。

8 追加意見

部会后、提出された意見はなし。